

PROGRAM

ソナタ	ヘ長調	ハイドン
ソナタ第11番	イ長調 K. 331 (トルコ行進曲付き)	モーツァルト
ソナタ第8番	ハ短調 Op. 13 「悲愴」	ベートーヴェン
ソナタ第1番	ハ長調 Op. 24	ウェーバー
ソナタ(1926)		バルトーク

インタビュー 鮎元 百

四季のコンサート 秋

1990年9月20日(木) PM 6:45
浜松市民会館ホール
主催: 浜松音楽友の会

1951年生美術。1958年、東大藝術系音樂學科在學中(8歲)就已成名。1965年大學畢業後，現在東京藝術大學音樂系擔任助教。1969年、9歲時才第一次上舞台，就獲得滿堂彩，現在東京藝術大學音樂系擔任助教。1974年、9月以日本青年第一回音樂大賞優等獎得主來日，被評家認為「音樂家的胚芽」。1976年、1978年、1982年、1986年、1998年已來日，被評家認為「音樂家的胚芽」。2001年德國「萊比錫音樂節」，他首次登台演出，受到樂評家和觀眾的一致好評。2002年12月以日本古典音樂大賞得主之名，被邀到中國國家大劇院演出，受到觀眾的熱烈歡迎。



リューポフ・チモフェーエワ ピアノ・リサイタル

チェンバロ・ソナタ へ長調

ハイドン(1732~1809)

彼は生存中に50数曲のソナタを書いたが、そのうちの50曲がチェンバロ・ソナタで、晩年のわずか5曲のみがピアノ・ソナタとして作曲されたものである。このような区別がなされたのは、ピアノが一般的に使用されるようになったのが1770年代以降であったことと関係している。ハイドンのチェンバロ・ソナタは1760年頃から書き始められ、最後のピアノ・ソナタは1795年に作曲された。ハイドンがこれらのソナタを書いた時期は、彼がエスレルハージ家に仕えていた頃とは一致する。従って、エスレルハージ家に仕えたことが、これらのソナタを書く動機になったのであろう。

今夕、演奏されるへ長調のチェンバロ・ソナタも1773年に作曲され、エスレルハージ家のニコラウス公に捧げられたものである。曲は3つの楽章から成る。明るく軽やかな第1楽章はアレグロ・モダラート、やや憂いを帯びた優美な第2楽章はアダージョ、ハイドン特有の率直で生き生きとした第3楽章はプレストである。

ソナタ 第11番 イ長調 K. 331

モーツァルト(1756~1791)

3楽章から成るソナタ第11番は、1783年頃に作曲された。第1楽章はアンダンテの主題と6つの変奏曲で書かれており、第5変奏でアダージョ、第6変奏でアレグロに変化する。第2楽章はモーツアルトにしては重々しいメヌエットである。この作品がモーツアルトのピアノ・ソナタの中で最も有名になったのは、「トルコ風」と題されたアレグレットの第3楽章(行進曲)のためであるといわれている。

モーツアルトが作曲した17曲(数え方によって異なる)のピアノ・ソナタは、すべて3楽章構成である。そのうち、第3楽章には様々なテンポが用いられており一般的な傾向は見られないが、第1楽章はアレグロのことが最も多く(15曲)、第2楽章はアンダンテのことが最も多い(11曲)。従って、第1楽章アンダンテ、第2楽章メヌエットという点は、他に全く例がない構成である。さらに、ソナタ形式がどこにも使われていないソナタであるという点でも、彼のソナタとしては珍しい特徴をもった作品である。

ソナタ 第8番 ハ短調 Op. 13

ベートーヴェン(1770~1827)

ベートーヴェンのピアノ・ソナタは40曲近く作曲されたと考えられているが、作品番号が付けられているのは32曲である。今夕演奏されるソナタは、その32曲中の8番目にあたる作品である。1799年ベートーヴェンが29歳の時に作曲したもので、彼の初期のソナタの頂点に位置する作品であるといわれている。「悲愴」という曲名は、彼自身によって付けられたものである。

ベートーヴェンの青年期は、フランス革命の時代であった。彼も音楽家として社会的な自立を目指し、音楽による自己表出の拡大と深化を目指して作曲活動を行った。このソナタには、そうしたベートーヴェンの姿勢がよく現れている。第1楽章は、曲全体の気分を支配するグラーヴェの序奏から始まる。アレグロの主部は、まさに情熱的な音楽である。アダージョの第2楽章は、ピアノでこれ以上スケールの大きな歌謡的音楽を作ることは不可能ではないかと思われるほどのものである。アレグロの第3楽章はロンド形式で書かれており、哀愁を帯びた主題が4回再現する。

ソナタ 第1番 ハ長調 Op. 24

ウェーバー(1786~1826)

ウェーバーは4曲のピアノ・ソナタを書いた。1810年から1812年にかけて、彼はドイツ各地で演奏旅行をしていたが、このピアノ・ソナタ第1番は1812年にベルリンで完成された。彼は、ベートーヴェンよりも1年早く、1826年に40歳で亡くなっている。つまり、ウェーバーとベートーヴェンは全く同じ時代に活躍した作曲家である。それにもかかわらず、ウェーバーには古典的なところは、ほとんど感じられない。シューベルトと共に完全に初期ロマン派の作曲家である。

ピアノ・ソナタ第1番にも、ウェーバーの音楽の特質、つまり、ロマン的な詩情、劇的な表現、色彩的な変化、技巧的な華麗さ、といったものがよくあらわれている。4楽章構成の本格的なソナタではあるが、古典的な形式にとらわれることなく、自由でのびのびとした雄大な作品である。アレグロの第1楽章は劇的な変化に富んでいて、アンダンテの第2楽章は叙情的な旋律で始まるが、特徴的なリズムも印象的である。メヌエットの第3楽章も主部のリズム的な面白さと中間部の旋律的な美しさの対比が見事である。ロンドの第4楽章は「無窮動」と題された個性的な音楽で、単独でもよく演奏される。

ソナタ

バルトーク(1881~1945)

この作品番号の付けられていないピアノ・ソナタは、1926年バルトークが45歳の時に作曲された。この1926年は、バルトークにとって「ピアノの年」といわれており、彼の優れたピアノの為の作品が集中的に書かれた年である。ピアノは構造的には打弦楽器であるが、この作品では特にピアノの打弦楽器的な特徴が強調されている。つまり、美しく流れるような旋律はほとんどなく、不協和音が叩き鳴らされることが多い。このような打弦楽器的な扱いや騒音的な響きに音楽的な意味を認めるという姿勢は、いわゆる現代音楽の特徴の一つであり、その面白さはドビュッシーの印象主義の音楽やシェーンベルク達の無調音楽によって開拓されたものである。

曲は3つの楽章から成る。ソステント・エ・ペザンテの第2楽章は重厚で奥深い音楽であるが、アレグロ・モダラートの第1楽章とアレグロ・モルトの第3楽章は躍動感にあふれており、作品全体としては力強い変化に富んだリズムと多彩な音色の面白さが聽きどころとなっている。なお、特に第3楽章には、バルトーク特有の祖国ハンガリーの民族音楽的な特徴が目立っている。